

## 鹿児島県甑列島の自然説明伝説

原田 信之<sup>1)</sup>\*

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2020年11月18日受理)

鹿児島県薩摩川内市の甑列島(上甑島、中甑島、下甑島)において自然説明伝説について調査したところ、島名説明伝説の「甑島」、岬名説明伝説の「唐船が鱸」、石名説明伝説の「トシドン石」「神籠石」「手掛石」、浜名説明伝説の「長目の浜」、池名説明伝説の「海鼠池」「貝池」、瀬名説明伝説の「十六人瀬」、穴名説明伝説の「八艘穴」など、多様な伝説が伝承されていた。特に、島名では巨石信仰、岬名では遣唐船漂着伝承、石名では来訪神と琉球文化との関係、浜名・池名では薩摩藩島津氏との関わりなどが注目される。これらの事例により、自然説明伝説は自然に存在しているものを説明する伝説であるが、説明を要するほどの内容を持つ伝説には、歴史的なものや文化的なものなど、何らかの背景があることが確認された。また、甑列島の伝承は九州文化圏の影響が強いことがうかがえた。

(キーワード) 自然説明伝説、甑列島、遣唐船漂着、来訪神トシドン、薩摩藩島津氏

### はじめに

鹿児島県の<sup>こしき</sup>甑列島(甑島列島、甑島ともよぶ)は、上甑島、中甑島、下甑島の有人三島と無人の小属島群からなっている。かつては薩摩郡里村(上甑島東部)、上甑村(上甑島西部・中甑島)、鹿島村(下甑島北部)、下甑村(下甑島南部)の四村に分かれていたが、平成十六年(二〇〇四)に合併して薩摩川内市の一部となった。上甑島と中甑島間は無人の中島を挟んで甑大明神橋と鹿の子大橋で結ばれ、中甑島と下甑島間は令和二年(二〇二〇)八月に甑大橋が架橋されて上甑島・中甑島・下甑島の有人三島が橋でつながり利便性が増した。これらの島々は鹿児島文化圏に属するが、琉球文化の影響を受けているとされる。

江戸時代の甑島について、天保十四年(一八四三)成立の『三国名勝図会』に詳しい記述がみえる。『三国名勝図会』は鹿児島藩の地誌であるが、卷之三十は薩摩国甑島郡の巻で、巻全体が甑島に関する内容となっている。卷之三十「総説」の「島形」の項に、以下のような記述がある(適宜句読点を付した。以下同様)。

此島、上甑・下甑ありて、島形南北に長く、北を上とし、南を下とす。上甑と下甑は、相離れて、上下二島、相距ること一里(中略)。甑島とは、上下二島の総称なり。上甑は、島形方にして、山林少く、四面に海湾多して、良港あり。下甑は、南北長く、東西短く、大抵山林にして、海湾なく、二島民居皆海岸にあり。属嶼若干あれども、本島の外は人居なし。<sup>1)</sup>

ここの記述には、甑島は上甑・下甑があつて島の形は南

北に長く北が上で南が下であること、上甑と下甑の間は一里(約四キロ)離れていること、甑島は上下二島の総称で上甑は島の形が四角で山林が少なく四面に海湾(陸地に入り込んでいる海)が多く良港があること、下甑は南北に長く東西に短くほとんど山林で海湾がないこと、二島の人々はみな海辺に住んでいること、属島が少しあるが本島以外には住む人がいないことが述べられている。この記述から、十九世紀中頃の甑列島は、現在の甑列島とほぼ同じ状況であったことがわかる。現在も上甑島は平坦で、下甑島は山林が多く、各集落は海辺にある。なお、『三国名勝図会』には上甑島・下甑島の二島についてのみ記されて中甑島の記述がないが、その時代には中甑島という呼称はなく上甑島の範囲が中島と中甑島(平良島)までを含んでいたためである<sup>2)</sup>。

甑列島はカノコユリの自生地として有名で、毎年七月下旬から八月頃にはあちこちで奇麗な花を咲かせる。大正、昭和の時代には球根が海外にまで出荷され、貴重な現金収入となっていた。また、天明、天保、明治、戦後の飢饉の際には、カノコユリの球根が食糧となって島民を救ったという<sup>3)</sup>。現在では、カノコユリは貴重な観光資源の一つとなっており、薩摩川内市の市花に制定されている(平成十七年二月十三日制定)。

下甑島で大晦日の夜に行われる伝統行事「甑島のトシドン」は、国指定重要無形民俗文化財(昭和五十二年五月十七日指定)であるとともに<sup>4)</sup>、平成三十年(二〇一八)にユネスコの無形文化遺産にも登録されている<sup>5)</sup>。トシドンは来訪神で、仮面で出現する。

\*連絡先: 原田信之 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

自然説明伝説は、石、池、浜など、自然にあるものを説明する伝説で、土地ごとに独自の自然説明伝説が伝承されている。甕列島において自然説明伝説を調査したところ、島名説明伝説、岬名説明伝説、石名説明伝説、浜名説明伝説、池名説明伝説ほか、多数の自然説明伝説が伝承されていた。本稿は、現地では採集した口承資料などの検討を通して、甕列島に伝えられてきた主要な自然説明伝説と伝説をめぐる諸問題について考察することを目的とする。

## 1 島名説明伝説と甕形の岩

甕島に伝承されている自然説明伝説のなかで最初に検討しておきたいのが、島名説明伝説である。甕島は、なぜ甕島という島名になったのであろうか。

『三国名勝図会』卷之三十「総説」の「島名文字」の項に「続日本紀宝亀九年、十一月の記に、甕島郡の名見えたり（中略）。上甕に、東西へ潮の通ふ海門あり。串瀬戸といふ。其内に甕形の巨石あり、島民是を甕島大明神と称す。下条に詳なり。甕島の名は、是に由て得たりとぞ」<sup>6)</sup> という記述がある。ここには、『続日本紀』宝亀九年（七七八）十一月の条に「甕島郡」の名が見えること、上甕島の串瀬戸に甕形の巨石があり島民はこれを甕島大明神と称していること、甕島の名はこの甕形の巨石に由来するらしいことなどが述べられている。現在も、上甕島西部の中甕島方面に架かっている甕大明神橋入口の黒岩（くろいわ）という所に甕形の巨石がある。

この、甕島大明神と称される甕形の巨石について、『三国名勝図会』卷之三十「神社」の「甕島大明神」の項に、以下のような記述がある。

上甕村串瀬戸にあり、海辺の大巖を神体とす。祭神詳ならず。或曰、海神なりと。上甕の中甕と、平との間、双方の巖嘴長く対し出で、其間絶断すること僅に一二町なるべくして、海門となり、東西の潮水相通ず。涸潮の時は、接壤となる。因て串瀬戸と号す。其中甕の地方より出たる巖嘴の上に大巖あり。其高さ三十尋許、宛も甕形の如し。是を神石と崇む。別に祠屋の設けなし。又甕巖の前に奇石あり、人形にて侍立するが如し。此甕巖は、往古当島の総廟なりといふ。前条に甕島の名は、甕形の神石に因て名を得たるとは、即此巖なり。祭祀九月九日。（後略）<sup>7)</sup>

この部分には、甕島大明神は上甕村串瀬戸にあり海辺の大岩を神体としていること、祭神は不詳だが海神という説もあること、その大岩は高さ三十尋（約五十四メートル）ほどで甕のような形をしていること、これを神石とあがめていること、神社の建物は設けられていないこと、甕岩の前に人が侍立しているような形の奇石があること、この甕形の岩は往古甕島の総廟といわれていること、前条で甕島の名は甕形の神石によったという岩はこの岩であること、祭

祀は九月九日であることなどが述べられている。

「甕」は、昔、米や豆などを蒸すのに用いた鉢形の瓦製の器で、のちに作成された木製のものは蒸籠（せいろう）という<sup>8)</sup>。『三国名勝図会』の記述から、上甕島にある甕形の巨石が由来となって「甕島」と称されるようになったらしいことがわかる。

では、現在の甕島では、甕島という島名の由来についてのどのように語られているのであろうか。次に、実際に甕島で聞いた話を示す。

### 〈事例1〉「甕島由来」

あそこの大明神が甕の、セイロ（蒸籠）に似てるからちゅうことで、甕（島）。あの岩が。という話を聞いたですけど。（岩の名は）甕大明神。昔薩摩の殿様がつけたんでしょう。五色だという人もいるし、甕大明神から甕の形しているからセイロの形しているから。甕はセイロちゅうことですよ。今はこうして車で行けるけども、昔はあそこまで行って誰かが名前つけたっていうの。やっぱりそういう、靈感の強い人が決めたんでしょうねえ。<sup>9)</sup>

〈事例1〉は上甕町里の男性から聞いたもので、甕大明神と称されている岩の形が甕に似ているから甕島となったという語りとなっている。これは、『三国名勝図会』の記述と同様で、現在でも甕形の岩から甕島になったという島名由来が語られていることがわかる。

### 〈事例2〉「甕形の岩は御神体」

甕という由来の、岩なんですけどね。ここにですね、甕島神社（甕島大明神の語り違い）であるんですよ。この神社の御神体がこの岩なんです。前は、こういうふうに、あったそうなんです。これが風化しまして、波風でだんだんと風化しまして、ここがはげ落ちて、こういう風な形に今なるとるんですけども。この形が、この、蒸器、米を蒸しますよね。逆さまに使うわけですけども、こういう形をしたから、甕と。この神社の御神体がこれですよ。<sup>10)</sup>

〈事例2〉は、甕島大明神（甕島神社と語り違っている）の御神体が甕の形をした岩であるという語りである。『三国名勝図会』では「甕島大明神」と記されているが、現在の甕島ではこの甕形の岩を「甕大明神」または「大明神」と呼称している（岩の近くに架かっている橋名は「甕大明神橋」）。甕大明神橋を架ける際には、御神体である甕形の岩を避けて架橋したそうである。また、甕形の岩のところにある鳥居は観光用に造られたものとのことであった。

甕島の島名由来には、甕形岩由来説のほかにも、次のような説がある。

### 〈事例3〉「甕島由来と五色説」

五色、数字の「五」、色（しき）ですね。五色。というのは、本土から、西方（せいほう）、この西の方（にしほう）、風景を見れば、その五色、五つの色に変わった夕焼けの中に、甕島が浮かんでくるというような話も、聞いておりますけど。その五色が甕（こしき）になった。<sup>11)</sup>

〈事例3〉は、日本本土側から西方の風景を見ると五つ  
の色に変わった夕焼けの中に甌島が浮かんでくるという  
ことで、五色（ごしき）が甌（こしき）になったという説  
についての語りである。上甌町里出身で昭和四年生まれの  
〈事例3〉の話者が、かつて明治生まれの人たちから聞いた  
と語ってくれた。なお、先にみた昭和二十五年生まれの  
〈事例1〉の話者の語りに「五色だという人もいるし」と  
いう部分があるが、この「五色」はこの五色由来説のこ  
とをいっているようである。このことから、現在の甌島で  
は、甌島の島名由来として、甌形岩由来説のほかに五色由  
来説があるらしいことがわかる（調査時の伝承状況は、ほ  
とんどの人が甌形岩由来説を語ってくれたが、五色由来説  
を知っている人は少数であった）。

上甌島の中甌地区にある市立中津小学校近くの海岸に  
甌島神社（上甌町中甌三六〇番地）がある。この神社につ  
いて、次のような語りを聞くことができた。

#### 〈事例4〉「甌島神社とマチジョ」

（甌島神社ができたのは）これはもう昭和の初めだろ  
うなと思いますね。コンクリートで、つなげてありますから。  
前は、この近くにもう一つ岩がありまして、もう一つ平ら  
な岩が。そこでその、この御神体に、奉納した。上甌の言  
葉ではマチジョというんです。巫女さんがね、ここで、奉  
納してた。ここでは足場が悪いもんだから、この近くに、  
遙拝場を造って、ここで奉納してたんです。へでここにま  
あ、神社を造られたというふうになつてくるようですけど  
も。（巫女が舞を奉納するのは）明治が大正の頃までは続  
いてたんじゃないですか。これ神社、できて、五、六十年  
は経ってると思います。（甌島神社は）新しいです、造り  
はね。ここには無かつたんです、神社は。ここにその遙  
拝場を設けて、その神社を。元はここにあったんじゃない  
んです、神社。

今は、あそこの地域の、中甌というところの中で、そ  
ういう担当をなさってる方がいらっしゃいますよね。（こ  
こに遙拝場を造ったのは）危ないと、足元が悪いから危  
ないので、そこの方に、変えたと。<sup>12)</sup>

〈事例4〉は甌形の岩と甌島神社の関係についての語り  
である。御神体の甌形の岩の近くに平らな岩があり、以前  
はその平らな岩の上で巫女（マチジョ）が舞を奉納してい  
たが、足元が悪く危険なので、昭和の初め頃中甌地区に遙  
拝場（甌島神社）を造ってそこで舞を奉納するようになった  
という。甌島神社が造られるまでは甌島神社が建ってい  
る地には何もなかったということであるが、中甌地区にあ  
る甌島神社からは御神体の甌形の岩がはっきり見えるの  
で、甌形の岩を遙拝するのに最適の地が選ばれたらしいこ  
とがわかる。

この甌島神社について、『上甌村郷土史』の「甌島神社  
（中甌）」の項には、次のように記されている。

字中津串、俗にいう洲崎の海岸にある。この神社は

実は遙拝所であって中甌湾をへだてて、西方一五〇〇  
米の所にある甌島大明神（甌大明神）という甌形の  
大岩が御神体である。祭神は三国名勝図会に「祭神詳な  
らず、或曰、海神なり」とあるように、はっきりし  
なかつたが、近年少彦名命を祭神としている。祭日は  
旧九月九日。／元来甌島大明神には社殿はなく、岩そ  
のものを神として拝していた。祭儀も甌岩の近くにあ  
る平岩の上で行なわれ、メーシジョーという少女の内  
侍舞も、ここで舞われた。／ところが、昭和三、四年  
頃ここは不便であり、危険でもあるというので、中甌  
の海岸に遙拝所を設け、これを甌島神社と名づけて、  
ここで祭儀や内侍舞も行なわれるようになった。／図  
に示した現在の甌島大明神の岩は、古代にはもっと高  
かつたはずで、風化変形して今日の姿になっている。  
突起があるのは、風化変形の途中に堅たい所が残って  
いるのである。古代には甌を伏せたような形であつた  
と思われる。<sup>13)</sup>

この記述から、甌島神社所在地は字中津串で俗に洲崎の  
海岸と呼ばれる地であること、遙拝所として甌島神社が設  
けられたのが昭和三、四頃であること、御神体の甌形の岩  
の祭神は不詳であつたが近年少彦名命とされたこと、祭儀  
もメーシジョーという少女の内侍舞も甌形の岩の近くにあ  
る平岩の上で行なわれていたが不便で危険なので遙  
拝所に移されたこと等、詳しい事情がわかる。「図に示した」  
とあるように、『上甌村郷土史』「甌島神社（中甌）」の  
項には「甌島大明神とも祭儀のあつた場所」の図が掲載  
されている。それによると、甌形の岩のすぐ北側（上甌島  
方向）にある平らな部分が祭儀の場所であつたことがわか  
る。そして、現在の甌形の岩にある上部の突起部分は風化  
で脱落した岩の残り部分で、かつては甌を伏せた形であ  
つたものが変形して現在のような形になっているようであ  
る。

甌形の岩の近くにある平岩の上で内侍舞を舞った巫女  
はメーシジョー（島内の各地域によってメーンジョー、メ  
ンドウ、マシジョウ等少しずつ異なる）と称されたとい  
うことであるが、十歳から十二歳位の少女の中からくじ引き  
で決め、二年交代が普通であつたそうで、昔は代々受け継  
いだという<sup>14)</sup>。今、甌島神社では、少女の内侍舞は行っ  
ていないそうである。

甌島で調査すると甌形の岩が島名の由来と現在でも伝  
承されていることが確認できたわけであるが、甌島にある  
巨大な甌形の岩（甌大明神）は、島根県雲南市三刀屋町の  
飯石神社（『出雲国風土記』に「飯石社」とある古社）等  
と同様に、本殿がなく石そのものを神体として祀った古制  
を残す石信仰の例として注目される<sup>15)</sup>。

## II 岬名説明伝説と遣唐船

次に、上甌島に伝承されている岬名説明伝説についてみてみることにする。上甌島の桑之浦には「唐船がとら」と称されている岬がある。この岬名は、遣唐船に由来するようである。『続日本紀』に甌島と関係のある遣唐使の記事があるので釈文を引用する（原漢文。適宜傍線・波線を付した）。

- A 『続日本紀』卷第三十五（光仁天皇）、宝亀九年（七七八）十月二十三日（乙未）の条

遣唐使の第三の船、肥前国松浦郡橋浦に到りて泊てたり。判官勅旨大丞正六位上兼下総権介少野朝臣滋野、上奏して言さく、「臣滋野ら、去りぬる宝亀八年六月廿四日、風を候ひて海に入る。七月三日、第一の船と同じく、楊州海陵県に到る。（後略）<sup>16)</sup>

- B 『続日本紀』卷第三十五、宝亀九年十一月十日（壬子）の条

遣唐の第四の船、来りて薩摩国甌嶋郡に泊てたり。その判官海上真人三狩らは、耽羅嶋に漂着して、嶋人に略し留めらる。但し、録事韓国連源ら、陰に謀りて纜を解きて去り、遣れる衆四十余人を率て来帰れり。<sup>17)</sup>

- C 『続日本紀』卷第三十五、宝亀九年十一月十三日（乙卯）の条

第二の船、薩摩国出水郡に到りて泊てたり。また第一の船は、海中にして中断し、舳・艫各分れぬ。主神津守宿禰国麻呂、并せて唐の行官ら五十六人、その艫に乗りて甌嶋郡に着く。判官大伴宿禰継人、并せて前入唐大使藤原朝臣河清が女喜娘ら四十一人は、その舳に乗りて肥後国天草郡に着く。継人ら上奏して言さく、「継人ら、去年六月廿四日、四船同じく海に入る。七月三日、楊州海陵県に着きて泊てぬ。八月廿九日、楊州の大都督府に到る。即ち節度使陳少遊、且つ奏し且つ放して、六十五人を京に入らしむ。十月十六日、上都に発赴す。（中略）正月十三日、長安に到る。（中略）三月廿四日、乃ち対顔して奏事を奏す。四月廿二日、辞し了りて首路す。（中略）六月廿五日、惟揚に到る。九月三日、揚子江の口より発ち、蘇州常耽県に至りて風を候ふ。その第三の船は海陵県に在り。第四の船は楚州塩城県に在り。並に発つ日を知らず。十一月五日、信風を得て、第一・第二の船同じく発ちて海に入る。海中に及る比、八日の初更、風急しく波高くして、左右の棚・棧を打ち破り、湖水船に満つ。蓋板挙く流れ、人・物随ひて漂ひ、夕撮の米・水を遺すこと無し。副使小野朝臣石根ら卅八人、唐使趙宝英ら廿五人、同時に没入して相救ふこと得ず。但臣一人のみ潜き行きて舳の檻の角に着き、前後を顧眄するに生理路を絶てり。十一日の五更に帆檣は船底に倒れ、断たれて兩段と為る。舳・艫各去りて到る所を知らず。四

十余人は方丈の舳に累り居りて、舳を挙げて没まむとす。纜を載ち柂を抛げて、少しく浮き上ること得。衣裳を脱却して裸身にして懸坐す。米・水口に入らぬこと、已に六日を経たり。十三日亥の時を以て肥後国天草郡西仲嶋に漂着す。臣が再生は叡造の救ふ所なり。歎幸の至に任へず。謹みて表を奉りて聞す」とまうす。<sup>18)</sup>

A部分『続日本紀』宝亀九年（七七八）十月二十三日の条で、この日に遣唐使第三船が肥前国松浦郡橋浦に唐より帰着したことがわかる（傍線部。橋浦には、現在の長崎県五島列島の、福江島の五島市玉之浦町説と中通島の新上五島町三日ノ浦説がある<sup>19)</sup>）。判官勅旨大丞正六位上兼下総権介少（小）野朝臣滋野の上奏文が引用されており、宝亀八年（七七七）六月二十四日に日本を出帆し、七月三日第一船と第三船が楊州海陵県に到着したと記してある（後略部分には唐での様子が記されているが引用を省略した）。この時に派遣された遣唐使は、第一船から第四船までの四船で船団を組み唐に向かった（宝亀六年〈七七五〉六月十九日任命、安芸国で四隻造船<sup>20)</sup>）。

B部分『続日本紀』宝亀九年十一月十日の条で、この日に遣唐使第四船が薩摩国甌嶋郡に唐より帰着したことがわかる（傍線部）。甌嶋（島）郡は上甌島と下甌島の総称であることから、この時の遣唐使第四船は上下どちらかの島に帰着したらしいことはわかるが、「甌嶋郡」だけでは上下どちらの島かは確定できない。しかし、『三国名勝図会』卷之三十三「中甌港」の項に「此港甌島中頗る幅濶の処なり。唐船漂着の時も、此港に泊繫す<sup>21)</sup>」とあることから、江戸時代には、この時の遣唐使第四船は良港とされる上甌島の中甌港に停泊したという伝承があったことがわかる（甌列島各地で調査したところ遣唐船が上甌島の中甌港に停泊したとの伝承は現在では伝えられていなかった）。甌島に帰着する前、その第四船に乗っていた判官の海上真人三狩らは耽羅嶋（韓国の済州島）に漂着し嶋人に略奪され留置されていたが、録事の韓国連源らがひそかに謀ってともづな（纜）を解いて去り、残った四十余人を率いて帰ってきたという。第四船もかなりの困難を経験したようである。

C部分『続日本紀』宝亀九年十一月十三日の条で、この日に遣唐使第二船が薩摩国出水郡（鹿児島県出水市）に唐より帰着したことがわかる（傍線部）。また第一船は、海中で中央から分断し、船首部分（舳）と船尾部分（艫）にそれぞれ分かれた（傍線部）。主神の津守宿禰国麻呂と唐の役人ら五十六人はその船尾部分（艫）に乗って甌嶋郡に漂着し（波線部）、判官大伴宿禰継人と前入唐大使藤原朝臣河清の娘の喜娘ら四十一人はその船首部分（舳）に乗って肥後国天草郡に漂着したという（傍線部）。

次の部分からは、第一船の船首部分（舳）に乗って肥後国天草郡に漂着した大伴継人の上奏文が記載されている。

この上奏文は、大伴継人たちの視点から見た遣唐使派遣報告書となっている（先に見たA部分で引用を省略した箇所は少（小）野滋野の上奏文がありほぼ同内容となっているが小異がある）。

継人たちが遣唐使一行は、去年（宝亀八年）六月二十四日、四船同時に日本を出発し、七月三日に楊州海陵県に到着した（以下、簡略に主要な日程を追う）。八月二十九日、楊州の大都督府に到着。十月十六日上都（長安）に向けて出発し、宝亀九年正月十三日長安に到着。三月二十四日、唐の代宗皇帝と謁見。四月二十二日、辞して帰途につく。六月二十五日、惟揚に到着。九月三日、揚子江の河口より出発し、蘇州常耽県に至って順風を待った。四船のうち、第三船は海陵県に停泊し、第四船は楚州塩城県に停泊していたが、それらの出発日はわからない。

十一月五日、順風となる季節風が吹いてきたので第一・第二船が同時に出発して海に入った（傍線部）。外海に達した八日の初更（午後八時頃）、風激しく波高くなり、左右の船板を打ち破って潮水が船に満ち、甲板はことごとく流れ去り、人や物は波に漂い、わずかな米や水も残らなかった。副使の小野朝臣石根ら三十八人と唐使の趙宝英ら二十五人は同時に海に沈んで救うことができなかった。ただ、私（大伴継人）一人は海中を潜り行き、船首の手すりの角にたどり着き、前後を見渡したところ、生きのびる道は絶たれていた。

十一月十一日の五更（午前四時頃）に、帆柱が船底に倒れ、船体が二つに分断され、舳（船首）と艫（船尾）がそれぞれ流れ去ってどこに行ったかわからなくなった。四十余人は方丈（約三平方メートル）の船首にすがりついていましたが、重さで船首全体が水没しそうになったので、ともづなを切って舵を投げ捨てると、少し浮き上がらせることができた。衣服を脱いで裸で船首にしがみついて座っていた。米や水を口に入れることなく、すでに六日経った。

十一月十三日の亥時（午後十時頃）、肥後国天草郡西仲嶋（鹿兒島県出水郡長島町の長島<sup>22)</sup>）に漂着した（傍線部）。私（大伴継人）が生き残ったのは天の救いによる。幸運の極みで喜びにたえない、と述べている。

これらの記述から、宝亀八年（七七七）から宝亀九年（七七八）にわたる全四船の出発と帰着の状況がうかがえる。それらを簡単にまとめると、次のようになる。

◆宝亀八年六月二十四日、四船同時に日本を出発

◆宝亀九年、四船がそれぞれ唐より日本に帰着

十月二十三日…第三船が肥前国松浦郡に帰着

十一月十日…第四船が薩摩国甌列島に帰着

十一月十三日…第二船が薩摩国出水郡に帰着

十一月十三日…第一船の船首部分（舳）が肥後国天草郡に漂着

十一月不詳日…第一船の船尾部分（艫）が薩摩国甌列島郡に漂着

薩摩国甌列島郡（甌列島）に漂着した第一船の船尾部分（艫）の漂着日が不詳であるが、状況から判断すると、十一月十三日か十四日あたりに甌列島に漂着したものと推定される。

十一月十一日の五更（午前四時頃）に第一船が二つに分断し、船首部分と船尾部分がそれぞれ漂流したとあるが、十一日の五更以降の状況説明は第一船の船首部分に乗って肥後国天草郡に漂着した大伴継人の視点によるものとなっているため、第一船の船尾部分に乗った者たちが甌列島までたどりついた詳しい状況はよくわからない。おそらく、船首に乗って漂流した大伴継人が経験したものとほぼ同内容の、食糧も水もない極めて過酷な漂流生活であったと推定される。

C部分にあるように、第一船の船尾部分（艫）に乗って甌列島に漂着したのは、主神の津守宿禰国麻呂と唐の役人ら五十六人であったという。では、第一船の船尾部分（艫）は甌列島のどこに漂着したのであろうか。その漂着した場所が、上甌島の桑之浦にある「唐船が艫」と称されている岬のところであったらしい。次に、上甌島で採集した話を示す。

#### 〈事例5〉「唐船が艫」

その唐船、唐ていうのは、唐からですね。中国との貿易があって、遣唐使の船が、漂流したので、唐船が艫ともという名前がついたということだそうです。（中略）中国のその、遣唐使の船が、大しけ（時化）のために、船が分裂したんですね。その船が、二つに割れて、そいで着いたのが唐船が艫——艫とゆうのは後ろの方のことを艫と——、が漂流したというのが、艫の名前じゃないでしょうか。<sup>23)</sup>

#### 〈事例6〉「唐船が艫」

それ遣唐船の艫が、船の艫が、寄ってきたんじゃないですか。唐船が艫。船の、後ろの方。だから唐船が艫というんじゃないですかねえ。遣唐船は、要するに太宰府から、博多かどっからか出たんでしょう。出ていって要するに、一番帆船がいい、しけない時期を狙ってまあ、五月かそんな頃か六月か、行ったんでしょうね。晴れの時、南風が吹く。（ここに流れたんじゃないですかねえ。<sup>24)</sup>

〈事例5〉と〈事例6〉は、遣唐使の船が大しけのために分裂し、艫の部分が漂着してきたので唐船が艫というようになったのではないかという語りとなっている。〈事例5〉は昭和四年生まれの男性で、〈事例6〉は昭和二十五年生まれの男性であった（ともに上甌島出身）。上甌島各地で唐船が艫という岬を知っているかを聞くと、聞いたことがあるという人が多かったので、ある程度は知られた岬名であることがわかる。しかし、唐船が艫という岬の名は知っていても、その由来まで知っている人は少なかった。

〈事例5〉と〈事例6〉の話者は遣唐船が甌列島に流されてきたことについて語っているのであるが、上甌島で調査

して、海流に関して興味深い話を聞いた。

#### 〈事例7〉「五島からの海流」

ここではですね、五島で船が遭難するでしょ、したら甑に寄るんです。人骨は、人は。だから、五島ですね、イカを釣るカナってご存知ですか。エギ（餌木）。エギなんか寄るんですこっちに。五島ガナっていうんですけど。カナってのはですね、エギのことなんです。イカ釣る、ミズイカを釣る、アオリイカを釣る、エギのこと。寄るんですよ。ちゅうことはやっぱり、唐船が鱸も、当然ここに寄るんでしょうねえ。人の遺体まで寄るんですよ。ここに寄ったですよ人が。五島の人だったんですよ。見つからん見つからんちゅうのがここに。<sup>25)</sup>

〈事例7〉は五島で船が遭難すると遺体が甑島に寄り、イカを釣るエギ（餌木）なども五島から甑島に流れ寄ってくるので、遭難した遣唐船も海流に流されて甑島の「唐船が鱸」に寄ってきたのではないかという語りである。

五島から甑島への海流といえば、下甑島瀬々野浦での調査中、子どもが言うことを聞かない時に「五島から流れてきたでしっかり言うこと聞かんとだめやで」と言ってしかると聞いた。お前は五島から流れてきた子だからいい子にしないとだめだという意味だということであった。この言葉から、甑島の人たちにとって、五島から甑島への海流の存在が普通に認識されてきたらしいことがうかがえる。

遣唐船は、先に引用した『続日本紀』宝亀九年十一月十三日の条（C部分）に「九月三日、揚子江の口より発ち、蘇州常耽県に至りて風を候ふ」とあるように、季節風や海流の状況を読みながら唐と日本とを往来していた。〈事例7〉の話者が述べているように、五島から甑島への海流の存在も、遭難した遣唐船が甑島に流されてきた要因の一つとなっていたのであろう。

なお、甑島の遣唐使に関係する地名に関して、角川日本地名大辞典『鹿児島県』所収「薩摩郡上甑村」の項に「宝亀9年第14次遣唐船が帰国の際、強風にあって漂流した。（中略）当村の北端の唐船が鱸（とうせんがとも）という岬は第1船に、また里村の東北端の唐船が鼻という岬は第4船に関係のある地名であろう」<sup>26)</sup>という記述がある。これまで見てきたように、「唐船が鱸」に関しては、上甑島北端に位置する桑之浦地区の北海岸に「唐船が鱸」という岬があり、これが遣唐使に関するものらしいという伝承も複数確認できた。ところが、もう一つの「唐船が鼻」という岬名に関しては、『里村郷土誌 上巻』所収「上甑島・中甑島地図」<sup>27)</sup>および角川日本地名大辞典『鹿児島県』所収「薩摩郡里村」の項の地図<sup>28)</sup>に里地区の東北方向の海岸にある白瀬鼻と冠崎の間に「唐船が鼻」という岬名が記されているのは確認できたが、それら以外の資料を見つけることができなかった。また、いくら聞き取り調査をしても「唐船が鼻」という岬名を聞いたことがある人は一人もい

なかった。これに関しては、もうすでに「唐船が鼻」という岬名についての伝承が途絶えてしまったのか、角川日本地名大辞典『鹿児島県』所収「薩摩郡上甑村」「薩摩郡里村」の項や『里村郷土誌 上巻』所収「上甑島・中甑島地図」の記述が誤っているのか、現時点では筆者には判断できなかった。

しかし、角川日本地名大辞典『鹿児島県』に「唐船が鼻」という岬名が記されているということは、角川日本地名大辞典『鹿児島県』が刊行された頃（一九八三年刊行）にはそのような伝承がまだ残っていたが、その後四十年近く経過するうちに伝承が途絶えてしまったと考える方が妥当のように思われる。もし「唐船が鼻」という岬名が本当であったとした場合、角川日本地名大辞典『鹿児島県』が記しているように、宝亀九年（七七八）十一月十日に遣唐使第四船が薩摩国甑島郡に帰着したところであった可能性があり、そうだとすると、第四船は「唐船が鼻」に帰着後移動し、「中甑港」に停泊（『三国名勝図会』卷之三十）したとも考えられるが、もちろん確証はない。この「唐船が鼻」という岬名の問題に関しては、後考を俟ちたい。

### III 石名説明伝説とトシドン

次に、甑列島に伝承されている石名説明伝説についてみてみることにする。甑列島には種々の石名説明伝説が伝承されているが、それらの中から興味深いものを中心にしていきたい。

下甑島には大晦日の夜に行われる伝統行事「トシドン」が伝承されている（昭和五十二年五月十七日国指定重要無形民俗文化財に指定、平成三十年ユネスコの無形文化遺産に登録）。ユネスコの無形文化遺産に登録された「来訪神：仮面・仮装の神々」では、「甑島のトシドン（鹿児島県薩摩川内市）」に加え、「男鹿のナマハゲ（秋田県男鹿市）」、「能登のアマメハギ（石川県輪島市・能登町）」、「宮古島のパーントゥ（沖縄県宮古島市）」、「遊佐の小正月行事（山形県遊佐町）」、「米川の水かぶり（宮城県登米市）」、「見鳥のカセドリ（佐賀県佐賀市）」、「吉浜のスネカ（岩手県大船渡市）」、「薩摩硫黄島のメンドン（鹿児島県三島村）」、「悪石島のボゼ（鹿児島県十島村）」が拡張登録された<sup>29)</sup>。

トシドンは仮面で出現する来訪神で下甑島に伝承されているが、なぜか上甑島には伝承されていない。日本本土のみならず、南西諸島各地に伝承されている来訪神との関係が目される。下甑島のトシドンでは、鼻の長い恐ろしい仮面をしたトシドンが、三～九歳の幼児のいる家庭を訪問する。トシドンは子どもたちの健やかな成長と幸福を願う「年の神様」で、家庭での幼児のしつけをよくするために行われてきた。現在、上甑島には、港トシドン保存会（手打地区）、麓トシドン保存会（手打地区）、本町トシドン

保存会(手打地区)、片野浦トシドン保存会(片野浦地区)、瀬々野浦トシドン保存会(瀬々野浦地区)、青瀬トシドン保存会(青瀬地区)という六つの保存会がありトシドン行事の保存に努めている<sup>30)</sup>。トシドンの伝承は、手打地区、片野浦地区、瀬々野浦地区でそれぞれ少しずつ異なっている。これらのうち、瀬々野浦ではトシドン石と称されている巨石についての伝承がある。次に、瀬々野浦で採集した話を示す。

#### 〈事例8〉「トシドン様とトシドン石」

トシドン様はね、天上の国から、空の上から、その時期になると、そのサエ川ちゅうのに下りて来られて、その松(サヘエ松)を、見張り台にして村中を観察する。そいでまあ生活は、トシドン石でして、たぶんそこで餅もついているんだらう。大晦日になると、餅のとぎ汁が流れてくる。この古町川(ふるまちがわ)へ流れてくるということですね。古町、この川です。この川、上流が、あっち(サエ川)へいっています。大晦日の近くになると(天から下りてくる)。(下りてくる日や帰る日は?)聞いていない。大晦日すんだら(正月過ぎに)帰るんじゃないですか。神様みたいなもんですね。トシドン様。(様をつけるのは)ほかのとは聞いたことないですね。(ここ瀬々野浦は)「様」てつけます。ただあの、トシドン石とかいう場合は、「様」ついてないですね。ただ地上に下りてきたら普通の生活になるんだなあいう感じですね。馬に乗らんとこれないのか。普通は空から飛び下りてくるわけ。<sup>31)</sup>

〈事例8〉はトシドンが瀬々野浦にどのように来て、滞在中はどのようにして、どのように帰っていくかについての語りである。トシドンは空の上にある天上の国から大晦日近くになるとサエ川に下りて来て、サヘエ松(サヘエガ松)を見張り台にして村中を観察する。生活はトシドン石でして、餅もそこでつく。大晦日になるとトシドンがついた餅のとぎ汁が古町川へ流れてくる。大晦日がすんだら正月過ぎに帰るのではないか。神様みたいなもので、瀬々野浦ではトシドン様と「様」をつけるが、他地区はつけると聞いたことはない、とのことであった。ここの語りの部分にはなかったが、トシドンは首のない馬に乗ってくるとされており、子どもをしかる時には「トシドン様が見とらるっど」と言うそうである。

〈事例8〉の話者はトシドンはサヘエ松(佐平松)を見張り台にして村中を観察し生活はトシドン石ですと語っているが、別の話者はトシドンはサヘエ松に下りてきてトシドン石(佐平石)の上から村中を観察すると語ってくれた。トシドンについての説明は、話者によって語りの内容に微妙な差異があった。トシドン石は瀬々野浦集落のはずれの山中にあり(旧道片野浦、手打道を約十五分登った所)、十メートル以上はある巨石であった。土地の人に案内してもらわないと見ることはできないが、トシドンはその石の上から集落の様子を見守っているという語り

得できる位置にあった。来訪神トシドンが天から下りてきて住むとされる巨石が「トシドン石」と称されていることは、巨石信仰の点からみても興味深いものがある。

巨石信仰という点でいえば、神籠石という巨石に関する伝承がある。次に下甌島手打で採集した話を示す。

#### 〈事例9〉「神籠石の泣き声」

神籠石ちゅうのがあるんです。何かこの石をです、石工が割ろうとしたところが、泣き声が聞こえた、ゆう言い伝えがあるんです。だからその神の石ということですね。僕らよりずうっと昔の話です。まあ昔は、こういう大きな石とか大きな山とかは、信仰の対象になってるんでしょうからね。<sup>32)</sup>

〈事例9〉は神籠石を石工が割ろうとしたところ泣き声が聞こえたという言い伝えがあり、神の石とされているという語りである。『下甌村郷土誌』「神籠石(こうごいし)」の項に「手打湾の両(右カ)岸、左右対称に、花岡(崗カ)岩の巨大な円石が、水ぎわにすわっている。／部落民はこの石を「こうごいし」と呼んで霊石であるという。／石塔その他土木用石材とするために多くの業者が手をつけたが、その都度、奇怪な事実(例えば爆薬を込めるための穴に、蛇がど(とカ)ぐるを巻いていたり、山草履が穴にかぶさっていたり、石工が怪我をしたり等々)、あるいは靈感があつて爆破を中止した等のことがあつて、その後は誰も手をつけないようになったという」<sup>33)</sup>とさらに詳しい顛末が記されている。神籠石は手打湾の右岸(西側)の海岸べりにある巨石である。破壊しようとする、その度に不思議なことが起きるので、神の石として誰も手をつけないようになったという。神籠石という表記は神がこもる石という意味なので、霊石として崇め、このような石名とされたのであろう。巨石を破壊しようとする不思議なことが起きるのでそのまま放置されていると説明される石は各地にあるが、この上甌島にある神籠石も、そのような石の一つといえよう。

下甌島瀬々野浦に手掛石という霊石がある。『下甌村郷土誌』「手掛石(てかけいし)」の項に「堅(堅カ)石に通ずる山道の途中、道脇にある高さ一・五メートル、周囲三メートルの、つぶらな石である。／「死者が手をかけて通る石」との伝説があつて信仰の対象となっている」<sup>34)</sup>と記されている。次に下甌島瀬々野浦で採集した話を示す。

#### 〈事例10〉「手掛石」

手掛石ていうのはね、冥途に行く前に、休んだり登って行く時に、ふんばって手を掛けて。ここはね、傾斜がきついですからね。この、大内浦という海岸から、「堅石」につながる道があつて、その途中にあるんですよ。ここは平家伝説ゆうのがありますよね。それは真偽はどっちなのか、そうであるかもしれないし、ないかもしれないんですけど。どうもその、そういう落人が来た時に、その道を通って、山奥へ逃げたんじゃないだろうかとという人もいま

す。あるいはこの村の人全体が、そういう人の子孫で、信仰上、その先祖が歩いた道を、死ぬ時は通るんだという、話はあるんですよ。信じる信じないは別。わからないんですけど、ただ、そのことは僕らのこのDNAの中にあって、まあその石を知らない人が多いんです。堅石もこの石（手掛石）も。そやけど、死ぬ前になるとその道を通って堅石まで行くんじゃないかと、言われている。で、そこに農作業の、山小屋があるんですよ。老人ホームがそこに。寝泊まりするんですけど農繁期には。ある時に、子どもがにぎやかに通っていった。ほで、山に来た人に、「誰か死んだあせんか」と。「昨日子どもがにぎやかに、明るく通っていったよ」と。「いや、どこそこの子どもが死んで」という話が。ほいてまたある時はですね、「ばあさんが泣きながら通ったけど誰か死んだあせんか」。やっぱあ合うんですな、言ってる符号が。まあそこ行くの二時間ぐらいかかるんですけど歩いたら。このへんまで行くのに。そういう話があるもんだから、不思議なことがあるもんやという、ことで。何でだろうかという話が、伝わってる。

生きてる人が、荷物を背中に背負って、疲れたらそこに休んでた。あるいは、背中であつ、このへんに俵を寄せて休んだ。便利なところに石があるなあいうこと。休憩所みたいなものでしょうなあ。いたるところに休憩所があった。<sup>たまごいし</sup>卵石ゆうとこもそんなんですけどね。その近くでみんな休んだ。<sup>35)</sup>

〈事例10〉は、下甕島瀬々野浦に伝承されている手掛石という霊石に関する語りとなっている。手掛石は、瀬々野浦の大内浦海岸から堅石につながる道の途中にある。下甕島には平家伝説があり、平家の落人が来た時にその道を通って山奥へ逃げたのではないかと、瀬々野浦の人全体がその子孫で信仰上その先祖が歩いた道を死ぬ時に通って堅石まで行くという話がある。そこに農作業の山小屋があり農繁期に寝泊まりするが、ある時子どもがにぎやかに通っていったので、山に来た人に「昨日子どもがにぎやかに明るく通っていったが誰か死んだのでは」と言うと、どこそこの子どもが死んでということがあった。ある時、「おばあさんが泣きながら通ったが誰か死んだのではないか」と言うと、やはり合った。そこへ行くのに歩いて二時間ぐらいかかる。手掛石では、生きてる人が荷物を背負って疲れたらそこに俵を寄せて休憩所のように休んでいた、ということであった。

瀬々野浦から北東へ約五キロの大字瀬々野浦字木床にある堅石は、高さ四・五メートル、周囲七・五メートルほどの石である<sup>36)</sup>。その堅石に行く途中にある石が手掛石で、集落で亡くなった人が手を掛けて通る石とされているといい、種々の不思議な話が伝わっているということであった。かつては山道を俵などの荷物を背負って歩き、疲れたら手掛石に荷物を寄せて休んでいたという。休むのにちょうどいい場所に石があったのであろう。瀬々野浦では、山

下、中村、宮野姓が平家落人の子孫だという伝説があるということであった。

〈事例10〉の末で語られている「卵石」という石も、休むのにちょうどいい場所にあつて、疲れたら卵石に荷物を寄せて休んでいたという。この卵石は、花崗岩で、表面がぱっくり割れたり、卵の殻のようにめくれていく特徴がある石だということなので、卵のような石ということから卵石と称されるようになったらしい。

下甕島瀬々野浦の手掛石は、平家の子孫という伝承がある瀬々野浦地区の人にとって、特別な意味を持つ霊石であることがわかる。

#### IV 浜名説明伝説と島津氏

最後に、甕列島に伝承されている自然説明伝説のうち、浜名、池名など、水辺にまつわる伝説についてみてみることにする。

上甕島に「長目の浜」という浜がある。これについて、上甕島で採集した話を示す。

##### 〈事例11〉「長目の浜」

長目の浜はですね、島津家の殿様が、行政視察みたいな形でおいでになって、長目の浜を見て、とにかく「おいしい眺めだ」ということで、命名した。島津久光（光久の語り違い）かな。通称それは長目の浜とは言いますが、<sup>なまごいけ</sup>海鼠池と貝池とゆうふうな二つに分かれてますので。それにもう一つ、<sup>くわさきいけ</sup>歙崎池というのがある。ここらを総称して、長目の浜という。<sup>37)</sup>

〈事例11〉は、薩摩藩主島津久光（光久の語り違い）が甕島に来てその浜の眺めが良かったので「長目の浜」と命名したという語りである。「長目の浜」は上甕島北東部の海辺にあり、北側から順に海鼠池・貝池・歙崎池が並んでおり、実際に極めて眺めのよい場所となっている。「長目の浜」の全景は、浜の北側に位置する田之尻展望所か、浜の南側に位置する長目の浜展望所から見るのが便利で、絶景ポイントとして各種観光パンフレットにも掲載されている。

『三国名勝図会』卷之三十「山水」の「眺浦」の項に、以下のような記述がある。

上甕村、瀬上の海辺にあり。海渚に海鼠池、及び旗間池・歙崎池等あり。此海辺沙渚平遠にして、碧石多く、盆山石を産す。高低の山阜相連り、島嘴突出し、海上には、天草島、及び肥薩の遠山画を呈し、桜島嶽を雲際に望み、海陸の風景佳絶にして、上甕第一の勝処なり。慶安五年六月、寛陽公当島に渡海し玉ひ、梶原某が宅に宿し、北浦に遊覧し玉ふ。今土謡の御縁曲は、此時に始るとぞ。<sup>38)</sup>

ここの記述は「眺浦」の説明となっている。眺浦は上甕村瀬上の海辺にあつて、海浜に海鼠池、旗間池（貝池）、歙



崎池等がある。この海辺は平坦で遠くひらけており、碧石が多くあり盆山石を産する。高低の山と丘が連なり、鳥嘴が突き出ており、海上には天草島が見え、肥後国や薩摩国の遠くに見える山が絵のようで、桜島嶽を雲際に望んで、海陸の風景がすばらしく、上甌第一の名勝地である。慶安五年六月、寛陽公（島津光久）が甌島に渡海されて梶原某宅に宿泊し、北方の浦を遊覧された。民謡の御縁曲（御縁節）はこの時に始まった、という。この記述から、「長目の浜」は、慶安五年（一六五二）六月に薩摩藩主島津光久（一六一六～一六九四）が来島して浦を遊覧し、眺めがすばらしい名勝地であることから「眺浦」と命名されたことがわかる。その後、「眺浦」から「長目の浜」と名称が変更されて今に至っているらしい。

長目の浜には北側から順に海鼠池・貝池（旗間池）・鉄崎池と三つの池が並んでいるわけであるが、海鼠池はなぜこのような名前になっているのであろうか。海鼠池について、上甌島中甌で採集した話を示す。

#### 〈事例12〉「海鼠池」

（海鼠池は）ナマコが、採れるとこなんです。今も採れます。出荷は前はしてましたが、今はもう適当にやってみたいですねえ。いいナマコですよ。大きくもない小さくもない。小さいのは小さいですけどおいしいですよ。<sup>39)</sup>

〈事例12〉はナマコが採れるから海鼠池と名前がついたと語っている。上甌島各地で海鼠池の由来を聞くと、ほとんどの人がナマコが採れるから海鼠池と名前がついたと語ってくれるので、海鼠池にナマコがいることはよく知られていることがうかがえた。

『三国名勝図会』卷之三十三「眺浦」項の次に「<sup>ナマコ</sup>海鼠池」の項があり、以下のように記述されている。

前条眺浦の海辺にあり、海より池まで半町許、池の周廻一里二十二町、深さ十四尋、淡鹹水にて、潮汐出入せず、池内に海鼠を産す。此海鼠尋常の種と異にして、其味佳絶なり。此島の絶品と称す。故に官用となす。海鼠初冬は甚小し、春に至て次第に長大なり。夏秋は復小くなる。冬より春三月頃まで采（采カ）るべし。村民舟を浮て是を漁す。復海鼠池の東、僅に二歩許を隔て、一池あり。旗間池といふ。周廻十九町四間、深さ八尋、両池の間は通路なり。此池は海鼠を生ぜず。又此池より数町東に、二池あり。其一は巢口池、其一鉄崎ノ池といふ。皆海辺にありて、亦海鼠を生ぜず。<sup>40)</sup>

ここの記述は、海鼠池の説明となっている。眺浦（長目の浜）の海辺にあり、海から池まで半町（約五十五メートル）ほど、池の周囲は一里二十二町（約六・四キロ）、深さ十四尋（約二十五メートル）、薄い塩水で、満潮と干潮で出入がなく、池内にナマコを産する。このナマコは普通の種と異なりその味はこの上なくすぐれており、この島の絶品と称され、官用として使われている。ナマコは初冬は大変小さく、春に至って次第に大きくなり、夏秋はまた小

さくなる。冬から春三月頃までに採るのがよい。村民は舟を浮かべてこれを採る。また海鼠池の東にわずか二歩ほどを隔てて旗間池といふ池があり、周囲十九町四間（約二キロ）、深さ八尋（約十四メートル）で、両池の間は通路となっている。旗間池にはナマコがない。また、この旗間池から数町（数百メートル）東に、二つ池がある。その一つは巢口池、もう一つは鉄崎池といい、皆海辺にあってナマコがない、とある。ここには、海鼠池、旗間池（貝池）、鉄崎池、巢口池（須口池）の名が見えるが、これらは甌四湖と呼ばれ、すべて汽水湖である<sup>41)</sup>。『三国名勝図会』は、この四湖のうちナマコがいるのは海鼠池だけで、他の三池にはナマコはいないと述べている。なお、この甌四湖のうち長目の浜の範囲に該当するのは海鼠池・貝池（旗間池）・鉄崎池までで、須口池（巢口池）は長目の浜から外れている。

海鼠池のナマコは、『三国名勝図会』に「此海鼠尋常の種と異にして、其味佳絶なり。此島の絶品と称す。故に官用となす」とあるように上質なものと知られていたようであるが、興味深いことに、この池のナマコは薩摩藩主島津氏が肥前国大村湾から移殖したものだといふ<sup>42)</sup>。ナマコを移殖した時期については、島津斉彬（一八〇九～一八五八）が薩摩藩主在任中（一八五一～一八五八藩主）の一八五〇年代に肥前国大村湾から極秘裏に移殖されたものだといふ説があるが<sup>43)</sup>、斉彬が藩主になる前の天保十四年（一八四三）成立の『三国名勝図会』に「海鼠池」の記事があることから、この説は成立せず、少なくとも島津斉興（一七九一～一八五九、藩主一八〇九～一八五一）以前の藩主時代に移殖されたものと推定される。そして、薩摩藩主がナマコを移殖したことにより海鼠池と池名が改称されたということであれば、ナマコが移殖される前は別の池名だったということになろう（改称前の池名は不詳）。

海鼠池のすぐ南に貝池（旗間池）がある。この池名について、次のような話を聞いた。

#### 〈事例13〉「貝池（旗間池）」

貝池そのものは、あそこに貝が、生息してるわけですよ。海水が入り出してですね、塩分と水とこう、あるもんですから、貝が育ったわけですね。もう今は採りつくしてないですが。まあ、殻は、ちょいちょい見かけます。お米がないですから、食糧になるものは、昔の人はすごいですからもう、食べられるものは、やっぱり。

伝説としてですね、昔、機織りの女がですね、恋に破れて自殺したのが旗間池だとゆう、これはあの、事実、は、史実は分かりませんが、そのような言い伝えで、旗間池といふ。<sup>44)</sup>

〈事例13〉には貝池（元は旗間池）の由来が語られており、貝池という名称については池に貝が生息しているのだから貝池といふと述べ、旗間池という名称についてはこの池で昔、機織りの女が恋に破れて自殺したので旗間池といふと

述べている。なお、〈事例13〉の話者は貝池にどういふ貝がいるかを語ってくれなかったが、〈事例12〉の話者によると貝池にはアサリやシジミ貝がいるということであった。問題は、貝池を代表する「貝」が何貝かということであるが、『上甌村郷土誌』に「貝池には真珠貝といわれるアコヤ貝が生息している。このアコヤ貝が浦内湾に移され、真珠養殖の母貝として利用されていた」<sup>45)</sup>と記されている点が注目される。このことから、貝池の「貝」は「アコヤ貝」を指す可能性が高いように思われる。

貝池のアコヤ貝は、ナマコと同様に、肥前国大村湾から移殖されたとされる。その時期は、島津斉彬が薩摩藩主在任中（一八五〇～一八五八藩主）の一八五〇年代であったという<sup>46)</sup>。先にみた天保十四年（一八四三）成立の『三国名勝図会』の「海鼠池」の記事に「海鼠池の東、僅に二歩許を隔て、一池あり。旗間池といふ」とあるように、天保十四年（一八四三）時点では貝池は「旗間池」と呼称されており、まだ貝は移殖されていないことがわかる。つまり、旗間池に「アコヤ貝」が移殖されたのは天保十四年以降ということになり、斉彬が薩摩藩主在任中の一八五〇年代に肥前国大村湾から移殖したという説と合致する。おそらく、海鼠池のナマコは島津斉興以前に移殖され、旗間池（貝池）のアコヤ貝は島津斉彬の時代に移殖されたのであろう。

貝池については、『上甌村郷土誌』「貝池の伝説」の項に「小島の貝池には次のような伝説がある。／昔機（はた）を織る女がいたが、織りそこなって貝池に身を投げて死んだ。／貝池は古名を旗間ヶ池（はたまが池）と呼んだことが、三国名勝図会に見えている。ハタマガ池は機女ヶ池（はためが池）の転化と思われる」<sup>47)</sup>と記されている。

つまり、元の旗間池という池名については、機織り女に由来するという伝説があることがわかる（機女ヶ池が転化して旗間池）。また、機織り女が自殺した原因については、恋に破れて自殺したという説と、機を織りそこなって自殺したという二説があるようである。

貝池（旗間池）のすぐ南にあるのが鯨崎池（通称鰻池）であるが、この池名について、次のような話を聞いた。

#### 〈事例14〉「鯨崎池（通称鰻池）」

鯨崎池くわさきいけというのは、桑のあれを、養蚕してたんじゃないですかねえ。（池名は）金偏の鯨です。耕す鯨。やはり、農地として、これを栽培してたんじゃないですかねえ、桑の木を。かつてはそういうような、あれでしたけど。鯨崎池はなんか、いわれがあると思います。鯨崎池は、通称鰻池うなぎいけで、私どもは申し上げてるんですけども。鰻池。鯨崎池よりか鰻池の方が、いつきは。あの、「新日本紀行」で取り上げられて。（鰻池という呼称は）ごく最近じゃなくて、かなり古いことは古いんですけども、そこで、あの、どっちかという淡水、塩分含んだ淡水なんですけども、鮒ふなとか鯉こいとかそういうものも、いわゆる、昔の人たちが食

べるみたい。網で採ったり。するとその中で、あの、池田湖の大鰻を、存じ上げてますか。鹿児島指宿の、大きい鰻。この鯨崎池というのも、大鰻がいるところで、有名になっちゃって、「新日本紀行」でも取り上げられて、報道したことがあるんですけどね。昔はだから、海とつながってたのかなあってというようなことも、考えられますけれども。養殖はしてないですね。（土地の人がその鰻を）食べてらっしゃいましたね。<sup>48)</sup>

〈事例14〉は鯨崎池（通称鰻池）の由来についての語りとなっている。〈事例14〉の話者によると、鯨崎池は池の周囲でかつて桑を栽培しており桑畑を鯨で耕すので鯨崎池となったという（この説は他の話者からは聞くことができなかつたが一事例として記録した）。そして、鯨崎池にはかなり大きな鰻がいるので、通称鰻池といい、土地の人は鯨崎池よりも鰻池という人が多いということであった。鯨崎池には、指宿市の池田湖にいるような大鰻がいるという。『鹿児島県の地名』「池田湖」の項に「湖中に生息する体長二メートルにも達する大鰻が観光客の度胆を抜いている」<sup>49)</sup>と記されているので、そのような大鰻が鯨崎池にも生息しているのであろう。鯨崎池の大鰻については、NHKの「新日本紀行」で取り上げられたことがあるということなので調べてみると、昭和四十九年（一九七四）一月七日に「新日本紀行「竜宮の海」——鹿児島県・甌島——」として放送されていた<sup>50)</sup>。この番組で鯨崎池の大鰻が取り上げられてからしばらくはかなり話題になったという<sup>51)</sup>。

なお、甌四湖の海鼠池、貝池（旗間池）、鯨崎池（通称鰻池）、須口池（巢口池）のうち、須口池については、池名の由来を聞くことができなかった。

長目の浜にある海鼠池、貝池（旗間池）、鯨崎池（通称鰻池）には、それぞれ、池名の由来が伝えられていたわけであるが、江戸時代から現在に至るまでの間に池名が変化したらしいことがうかがえた。海鼠池は、島津斉興（一七九一～一八五九、藩主一八〇九～一八五一）かそれ以前の薩摩藩主時代にナマコが移殖されたものとみられ、ナマコ移殖以降に元の池名（未詳）から海鼠池へと池名が変更されたとみられる。貝池（旗間池）は、天保十四年（一八四三）成立の『三国名勝図会』に旗間池とあることから、天保十四年以降に貝池へと池名が変更されたとみられる。鯨崎池は『三国名勝図会』にも鯨崎池とあるので古い池名であることがわかるが、近年は「鰻池」という通称を用いる人が多いということなので、池名の変化過程にあるように思われる。これらの事例から、池名も時代とともに変化していく様子が見えてくる。また、隣接するこの三つの池の場合、「海鼠」池への名称変更がきっかけとなり、旗間池から「貝」池へ、鯨崎池から通称「鰻」池へと生物名つなぎで池名が変化していったようにも思われ、興味深いものがある。

海辺に関する自然説明伝説では、下甌島にある「十六人

瀬」という瀬名の由来を聞いた。次に下甌島片野浦で聞いた話を示す。

〈事例15〉「十六人瀬」

十六人瀬じゅうろくにんぜがある。十六人、死んだっていつてる。それはもう、遭難して、潮が満ちた時は沈んでしまったり、潮引いた時に出てきたりする時に、そこにあれしとって死んだっていつて十六人だっていつて。遭難して一緒に（死んだ）。（いつの話か？）もうそらわからない。昔からわしなんかこまか（小さい）時から十六人瀬、十六人瀬いうて。

（片野浦の）ここ、ちょっと出てる所。ちょっと、十メートルばかり沖に、沈んだりあれしたり。人が、（潮が）引いたら出てきて、大潮の時なんかは沈んでしまうというところ。だからこの出っぱがあるでしょ、出っぱのところ少し離れてる。十メートルも離れてないかも。結局、ちょっとは出てるんですけど、大潮なったら隠れてしまう。完全には沈んでなかった。だからその、瀬が出とったからそこにあれしたんじゃろうけど、波で、たたかれれば、飛んでは（這）って。そこにたどり着いたんじゃろうけど。<sup>52)</sup>

〈事例15〉は、下甌島片野浦にある「十六人瀬」についての語りとなっている。昔、船が遭難して十六人が一緒に死んで浅瀬に遺体があがったといい、その浅瀬を十六人瀬というようになったと伝えられているという。十六人瀬の位置は、下甌島片野浦の南側の、少し出っ張ったところの浅瀬あたりとのことであった。この瀬名は、十六人が遭難した事件が元となってつけられたようである。

また、海岸の崖下に空いている穴に関する自然説明伝説では、下甌島にある「八艘穴」という穴名の由来を聞いた。次に下甌島瀬々野浦で聞いた話を示す。

〈事例16〉「八艘穴」

八艘穴はっそうがな。平家の軍船を、八艘隠したとか。せえで、三人しか来ないのにどうして八艘なのか、いう。あるいは、八艘入るぐらいのスペースでそう言われるいう説もあるんですけど。穴自体はそんな大きな穴ではない。ただね、大きな穴は八艘穴以外にコシデの穴というのがあって、そこなら八艘入りそう。八艘穴よりは、手前の方です、はるかに。（コシデの穴があるのは）岸壁ですね、垂直の。八艘穴はもう、三トンぐらいの漁船が入っていったら、バックで出てこんと出れないような穴ですけどね。（コシデの穴の伝説は）何にもない。<sup>53)</sup>

〈事例16〉は八艘穴はっそうがなという洞穴の由来を語っている。平家の落人が軍船を八艘隠したからという伝承と、船が八艘入るぐらいの大きさだからという伝承があるそうである。穴自体はそれほど大きくないようで、コシデの穴の方が八艘穴よりも大きいという。これらの穴は垂直の岸壁の下部にあり、八艘穴は三トンぐらいの漁船が入っていったらバックで出てこないと出られないぐらいの大きさで、コシデの穴は船が八艘うちかわうちぐらいは入りそうな大きさだという。

八艘穴は内川内地区の北側の鹿島方面にいったところ

の岸壁下部にあり、コシデの穴は内川内地区の南側の瀬々野浦方面にいったところの岸壁下部にある<sup>54)</sup>。コシデの穴の伝説はないそうである。

『三国名勝図会』卷之三十「山水」の「八艘穴」の項に、以下のような記述がある。

下甌村内、瀬々浦の海岸にあり、窟穴西に向ふ。其大さ漁船八艘を泊すべし。大風といへども、少しも患へなし。因て八艘穴といふ。窟中に船を入れて舷を叩けば、大に響こと雷の如く、洞巖崩るゝに似たり。故に衆人恐怖して、船を泊する者なしといふ。<sup>55)</sup>

ここの記述は八艘穴についての説明となっている。八艘穴は下甌村瀬々浦（瀬々野浦）の海岸にあり、穴は西に向っている。その大きさは漁船八艘が停泊できるほどで、大風が吹いても少しも障害にならないため八艘穴といわれている。洞窟の中に船を入れて船縁をたたくと雷のように大きな音が響き、洞窟が崩れるような音がするので、皆が恐れて船を停泊する者がいない、という。

『三国名勝図会』では、「漁船八艘」が停泊できるほどの大きさの洞穴だから八艘穴という説明されているので、小舟が八艘入る大きさということなのであろう。〈事例16〉の話者は平家の落人が軍船を八艘隠したからという説について語っているが、『三国名勝図会』は平家伝説にはふれていない。

『鹿兒島県の地名』に「八艘穴は船を八艘ほど収容できる岩穴で、平家の落人が船八艘を隠したと伝える」<sup>56)</sup>とあるように、甌島には平家伝説があり、八艘穴も平家伝説の一つとして知られている。甌島の平家伝説について、『甌島物語』が「平家の落人は平良・江石・太良・長浜・青瀬・手打・瀬々ノ浦等甌島の各地に住みついた」<sup>57)</sup>と述べているように、甌列島各地に平家伝説が伝承されている。なお、〈事例16〉の話者が「平家の軍船を、八艘隠したとか。せえで、三人しか来ないのにどうして八艘なのか」と述べているが、この発言には、瀬々野浦に平家の三人が来たという伝説が背景にある（本稿の〈事例10〉「手掛石」のところで述べた、瀬々野浦では三姓が平家落人の子孫だという伝説と関連する）。

このように、甌列島における水辺にまつわる自然説明伝説は多様で、興味深い事例がこの他にも多数あるが割愛する。

## 結 語

以上で、甌列島に伝えられてきた主要な自然説明伝説と伝説をめぐる諸問題に関する筆者なりの考察を終えることとする。

甌島の自然説明伝説群の中でも重要なものの一つが島名説明伝説である。甌島という島名の背景には、甌形の岩の存在があった。甌島で調査すると、甌形の岩（甌大明神）

があることから甌島になったという島名説明伝説が現在でも語られている。もともと甌島大明神には社殿はなく、岩そのものを神として拝し、かつては甌形の岩の近くにある平岩の上で祭儀や巫女（メーシジョー）の内侍舞が行なわれた。甌島にある巨大な甌形の岩（甌島大明神、甌大明神）は、本殿がなく石そのものを神体として祀った古制を残す石信仰の例として注目される。

上甌島の桑之浦に「唐船が鱸」と称されている岬があるが、その岬名説明伝説は大変興味深い。『続日本紀』によると、宝亀六年（七七五）六月十九日に任命された遣唐使一行は、宝亀八年（七七七）六月二十四日、四船同時に日本を出発し、その後、唐での遣唐使としての役割を終え、宝亀九年（七八八）に四船がそれぞれ唐より日本に帰着した。しかし、第一船は大しけのために船首部分（舳）と船尾部分（艫）の二つに分裂してそれぞれ漂流し、十一月十三日第一船の船首部分（舳）が肥後国天草郡に漂着し、十一月不詳日（十三日か十四日頃か）第一船の船尾部分（艫）が薩摩国甌島郡に漂着した。その時、第一船の船尾部分（艫）が漂着したところが、上甌島桑之浦の「唐船が鱸」と称されている岬であったらしい。上甌島では現在も「唐船が鱸」という岬に関する岬名説明伝説が伝承されている。この「唐船が鱸」という岬に関する岬名説明伝説は、『続日本紀』に記されていない情報で、極めて興味深い事例となっている。

甌列島には種々の石名説明伝説が伝承されている。下甌島には大晦日の夜に行われる伝統行事「トシドン」が伝承されている。トシドンは仮面で出現する来訪神で、日本本土のみならず、南西諸島各地に伝承されている来訪神との関係が注目される。トシドンの伝承は下甌島各地で差異があり、瀬々野浦ではトシドン石と称されている巨石に来訪神トシドンが天から下りてきて住むとされ、石名説明伝説と関係する。トシドン石の伝承は、巨石信仰の点からみても興味深い。その他、下甌島手打にある神籠石という巨石は、石工が割ろうとしたところ泣き声が聞こえたという伝承があり神の石とされている。また、下甌島瀬々野浦にある手掛石という霊石は「死者が手をかけて通る石」との伝説があり信仰の対象となっている。なお、下甌島瀬々野浦にある「卵石」は形状が卵に似ているから命名されたらしく、近年有名になった瀬々野浦にある「ナポレオン岩」も形状がナポレオンの顔に似ているから命名されたようで、このような事例では深い由来は当然語られない。

甌列島には水辺にまつわる自然説明伝説が多数伝承されている。上甌島に「長目の浜」という浜があり、薩摩藩主島津光久が甌島に来てそこの浜の眺めが良かったので「長目の浜」と命名したと伝えられている。『三国名勝図会』に「眺浦」とあるので当初は「眺浦」と称され、後に「長目の浜」と変更されたらしい。長目の浜には北から順に海鼠池、貝池（旗間池）、欽崎池（通称鰻池）という池

が並んでおり、それぞれ池名の由来が伝承されている。海鼠池はナマコがいるのでこの池名になったらしい。貝池は貝（アコヤ貝か）がいるからこの池名になったらしく、元は旗間池といった（機織り女が池に身を投げて死んだので機女ヶ池から旗間池となった）。欽崎池は池の周囲でかつて桑を栽培しており桑畑を鋤で耕すのでこの池名になったという伝承があった（大鰻がいるので通称鰻池という）。また、これらの池は、江戸時代から現在に至るまでの間に池名が変化したらしい。海鼠池は、島津斉興かそれ以前の薩摩藩主時代にナマコが移殖されたものとみられ、ナマコ移殖以降に元の池名（未詳）から海鼠池へと池名が変更されたとみられる。貝池（旗間池）は、天保十四年（一八四三）成立の『三国名勝図会』に旗間池とあることから、それ以降に貝池へと池名が変更されたとみられる。欽崎池は『三国名勝図会』にも記載されている古い池名であるが、近年は「鰻池」という通称を用いる人が多いということなので、池名の変化過程にあるらしい。これらの事例から、池名も時代とともに変化していく様子がかがえた。瀬名説明伝説では、下甌島片野浦にある「十六人瀬」があり、昔、船が遭難して十六人が一緒に死んで浅瀬に遺体があがったのでその瀬名がついたという。海岸下の穴に関する穴名説明伝説では、下甌島内川内近くに「八艘穴」があり、平家の落人が軍船を八艘隠したからという伝承と、船が八艘入るぐらいの大きさだからという伝承がある。

自然説明伝説は、自然に存在しているものを説明する伝説であるが、説明を要するほどの内容を持つ伝説には、歴史的なものや文化的なものなど、何らかの背景があることが確認された。

本稿での検討により、甌列島の伝承は、九州文化圏の影響が強いことがうかがえた。本稿では触れることができなかった、来訪神トシドンと琉球文化との関係や、他地域の自然説明伝説に関する問題など、残された諸問題については、別稿で検討することとしたい。

## 注・文献

[なお、本稿の諸資料よりの引用文中、旧漢字・異体字は原則として通行の字体に改めた。]

- 1) 『三国名勝図会 第二巻』（青潮社、一九八二）、一〇五九～一〇六〇頁。
- 2) 『上甌村郷土史』（上甌村、一九八〇年）には、上甌島・中島・平良島（中甌島）について、「現地では中甌島という呼称はないのであって、単に平良というのが普通で、時に平良島ということもある。（中略）昔上甌島といった所は、厳密に言えば、上甌本島と中島と平良（平良島）の三島から成っている。しかし、この三島は、干潮時には地続きとなるので、昔は一島と見なしていたものであろう」（一二八頁）と記されている。

- 3) 小川三郎氏『甕島』（春苑堂出版、二〇〇一年）、一三九～一四四頁。
- 4) 下甕村教育委員会編「昭和52年5月17日 国指定重要無形民俗文化財 甕島のトシドンの解説」（鹿児島県下甕村教育委員会・甕島のトシドン保存会、一九七九年三月）。なお、この冊子全文は『下甕村郷土誌』（下甕村、二〇〇四）に転載されている（九四五～九五七頁）。
- 5) 文化庁ホームページ「ユネスコ無形文化遺産「来訪神：仮面・仮装の神々」認定書伝達式の開催について」  
[https://www.bunka.go.jp/koho\\_hodo\\_oshirase/hodohappyo/1416874.html](https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1416874.html) [2020.8.アクセス]
- 6) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、一〇六〇頁。
- 7) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、一〇七九～一〇八四頁。
- 8) 『日本国語大辞典』（小学館）「甕」の項に「昔、米や豆などを蒸すのに用いた器。鉢形の瓦製で、底に湯気を通すいくつもの小穴をあけ、湯釜（ゆがま）にのせて蒸した。のち、方形または丸形の木製とし、底にすのこをしいたものを蒸籠（せいろう）という。こそき。」とある。
- 9) 話者は鹿児島県薩摩川内市上甕町里の男性（昭和二十五年生まれ）。平成二十七年（二〇一五）八月十四日・原田調査、採集稿。
- 10) 話者は鹿児島県薩摩川内市上甕町里の男性（昭和二十三年生まれ）。平成二十七年（二〇一五）八月十四日・原田調査、採集稿。
- 11) 話者は鹿児島県薩摩川内市上甕町里の男性（昭和四年生まれ）。平成二十七年（二〇一五）八月十三日・原田調査、採集稿。
- 12) 話者と調査日は注10と同じ。
- 13) 注2の『上甕村郷土誌』、一九七～一九八頁。
- 14) 注2の『上甕村郷土誌』、「甕島のメーンジョー（巫女）」の項（五六六～五七〇頁）参照。
- 15) 『国史大辞典』（吉川弘文館）「磐座」の項、『島根県の地名』（平凡社）「飯石神社」の項。
- 16) 新日本古典文学大系『続日本紀 五』（岩波書店、一九九八）、七三頁。原漢文だが釈文を引用した（以下の引用も同じ）。
- 17) 注16の『続日本紀 五』、七七頁。
- 18) 注16の『続日本紀 五』、七七～八一頁。
- 19) 注16の『続日本紀 五』、補注35の「一二 橋浦」（五三四頁）参照。
- 20) 注16の『続日本紀 五』、宝亀六年六月十九日の条（四五三頁）、補注33の「三四 宝亀六年任命の遣唐使」（五八七頁）参照。
- 21) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、一〇六九頁。
- 22) 『鹿児島県の地名』（平凡社）、「出水郡」、「長島」の項。
- 23) 話者と調査日は注11と同じ。
- 24) 話者と調査日は注9と同じ。
- 25) 話者と調査日は注9と同じ。
- 26) 角川日本地名大辞典『鹿児島県』（角川書店、一九八三）所収「薩摩郡上甕村」の「沿革」の項（九九三頁）。
- 27) 『里村郷土誌 上巻』（里村役場、一九八五）所収「上甕島・中甕島地図」（三一頁）。
- 28) 注26の角川日本地名大辞典『鹿児島県』所収「薩摩郡里村」の項の地図（一〇〇〇頁）。
- 29) 注5と同じ。
- 30) 注4と同じ。
- 31) 話者は鹿児島県薩摩川内市下甕町瀬々野浦の男性（昭和二十三年生まれ）。平成二十七年（二〇一五）八月八日・原田調査、採集稿。
- 32) 話者は鹿児島県薩摩川内市下甕町手打の男性（昭和十四年生まれ）。平成二十七年（二〇一五）八月十日・原田調査、採集稿。
- 33) 『下甕村郷土誌』（下甕村、二〇〇四）、四五七～四五八頁。
- 34) 注33の『下甕村郷土誌』、四五八頁。
- 35) 話者と調査日は注31と同じ。
- 36) 注33の『下甕村郷土誌』、「堅（堅カ）石（たていし）」の項、四五八頁。
- 37) 話者は鹿児島県薩摩川内市上甕町中甕の男性（昭和十七年生まれ）。平成二十七年（二〇一五）八月十二日・原田調査、採集稿。
- 38) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、一〇六三～一〇六八頁。
- 39) 話者と調査日は注37と同じ。
- 40) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、一〇六八～一〇六九頁。
- 41) 『鹿児島県の地名』（平凡社）、「上甕島」の項。
- 42) 注2の『上甕村郷土誌』、「なまこ池」の項に「このなまこは旧藩時代薩摩の国の藩主島津公が、長崎の大村湾から輸入してこの池に放ち繁殖して現在に至っている」（一二頁）とある。
- 43) 小川三郎氏『甕島』（春苑堂出版、二〇〇一）に「なまこ池のナマコは佐賀大村湾から移入されたものらしいと古老が伝えている。アコヤガイの移入のことが『阿久根郷土誌』にある。この貝が薩津五色浜に移植されたのは島津斉彬藩主在任中の一八五〇年代に行われた。阿久根在、中村武吉氏に命じたとある。（中略）ナマコもアコヤガイと一緒に移入されたものと思われる。／かつてナマコの干乾品（イリコ）は禁制品であった。極秘裏の移入であったことはいまでもない。／イリコは藩の財源ともなり貢献したとされる。／なまこ池のナマコは斉彬公のおめがねにかなって、その期待にそえたものと思われる。／その製造法などが記録として残されていない

いのは、イリコが禁制品であったことから、外に知れることを防ぐためではなかったのか。」(一六二～一六三頁)と記されている。

- 44) 話者と調査日は注11に同じ。
- 45) 注2の『上甌村郷土誌』、一四頁。
- 46) 注43参照。
- 47) 注2の『上甌村郷土誌』、二〇六頁。
- 48) 話者は鹿児島県薩摩川内市上甌町中甌の男性(昭和十七年生まれ)。平成二十七年(二〇一五)八月十二日・原田調査、採集稿。
- 49) 『鹿児島県の地名』(平凡社)、「池田湖」の項。
- 50) NHKアーカイブス、番組表検索結果によると、NHK「新日本紀行「竜宮の海」——鹿児島・甌島——」は1974年1月7日午後7時30分-7時59分(再放送は1974年1月8日午後11時15分-11時44分)に放送された。放送内容を見ていないため、番組内で大ウナギについて紹介したかどうかは未確認。  
<https://www.nhk.or.jp/archives/> [2020.8.アクセス]
- 51) NHKが大ウナギについて放送したことについては、別の記録がある。注43の小川三郎氏『甌島』「鍛崎池」の項に「方言ではカザーキ池と呼ばれる。／これまたトピックスがあり、日本一の大ウナギが採れた池として知られている。NHKが昭和五十九年取材撮影し、全国に報道されたことで驚異的となった。(中略)人間のふとももぐらいの大きさであり、長さは約二メートル近くはある」(三四頁)と記されている。
- 52) 話者は鹿児島県薩摩川内市下甌町片野浦の男性(昭和二十二年生まれ)。平成二十七年(二〇一五)八月八日・原田調査、採集稿。
- 53) 話者と調査日は注31に同じ。
- 54) 注33の『下甌村郷土誌』に、八艘穴・コシデの穴等の地図(三頁)、コシデの穴の写真(一三～一四頁)、八艘穴の写真(一八頁)が掲載されている。
- 55) 注1の『三国名勝図会 第二巻』、一〇七八頁
- 56) 『鹿児島県の地名』(平凡社)、「瀬々野浦村」の項。
- 57) 松竹秀雄氏『甌島物語 改訂版』(春苑堂書店、改訂版一九七三)、二七頁。

#### 〔付記〕

本稿は、日本学術振興会平成二十七年度～三十一年度科学研究費・基盤研究C・課題番号15K02222の成果の一部である。